人間の幸福（well-being）における動物の役割とソーシャルワーク教育

～相談援助実習が『人と動物との関係』に関する内容をどの程度含んでいるのかに関する質問紙調査の結果を通しての考察～

○東洋大学　　佐藤　亜樹（002622）

人と動物の関係、ソーシャルワーク教育、相談援助実習

１．研 究 目 的

背景及び目的：米国ではソーシャルワーカー養成教育が、『人と動物の関係』に関する内容をどの程度含んでいるのかを探索した実証的研究が少ないながら存在する。例えば Arkow は、2016 年時点で、全米の 550 校のソーシャルワーク学部のうちの 21 校（3.8%）が『人と動物の関係』に関する内容をカリキュラムに含んでいたと報告している。一方、我が国においては、実態調査すら行われていない。本研究では、我が国における大学等の高等専門教育機関が、ソーシャルワーク教育を行う際に『人と動物の関係』に関する内容をどの程度含んでいるのかを明らかにすることを目的として実施された調査結果を報告する。

２．研究の視点および方法

調査疑問・調査対象：調査疑問は、「ソーシャルワーク相談援助実習の中に、『人と動物の関係』に関する内容はどの程度含まれているのか」である。調査対象は、2016 年 8 月時点において日本社会福祉士養成校協会の「社会福祉士の学校名簿」に掲載されている大学院、4 年制大学、短期大学、一般養成施設、専修学校であり、かつ社会福祉士国家試験の受験資格を与えている 360 課程である。この 360 課程すべてに質問紙を郵送し、うち 137 課程から回答を得た（回収率：38.1%）。回収率を高めるために、まず 2016 年 10 月初旬に質問紙を郵送し、その 2 週間後に、360 課程すべてに回答の御礼・督促の葉書きを郵送した。11 月初旬には、未回答の養成課程に向けて質問紙を再郵送した。各校の代表者もしくは実習先について熟知している教職員に回答を依頼した。

質問紙：質問紙は、「授業」・「実習」・「感想・助言・提案」という構成であるが、この発表では「実習」に関する結果のみが報告される。回答者にはまず、各校が提携している実習先の中に、『人と動物の関係』に関する内容を含む実習先があるかどうかについて尋ねた。「ある」と回答した養成校には、該当する実習先の（1）総数や、（2）種別、（3）2016 年度の実習先として継続して確保されたかどうか、(4)『人と動物の関係』に関わるサービスの実際（例：動物介在療法、災害時のペットと飼い主への援助、悲嘆とペットロス等）について尋ねた。また、学生から当該実習先での実習要請依頼があったかどうかについても尋ねた。「ある」と回答した養成校には、(1) 学生からの要請総数、(2) 当該実習先を開拓するための最大の障壁、また、(3) 当該実習先を開拓するための方法や案について尋ねた。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき、各養成校には、本研究の目的、個人情報の保護（被験者個々が特定されない分析方法の使用やデータの厳重な管理・保管等）、調査への自発的参加について、実習指導時に口頭及び書面にて説明を行った。

4．研 究 結 果

回答した137課程中の93課程（69.4%）が4年制大学にあり、37課程（27.6%）が一般養成施設・専修学校にあった。137課程中の13課程（9.8%）が、『人と動物の関係』に関する内容を含む実習先と「提携している」と答えた。同13課程のうち10課程（90.9%）が『人と動物の関係』に関するサービスを提供している実習先を「1か所」と回答し、別の1課程（9.1%）は「3か所」と回答した。また、『人と動物の関係』に関する内容を含む実習先の種別は、介護保険法関連施設が最も多く（$n=5$）、続いて老人福祉法関連施設（$n=4$）、障害者総合支援法関連施設（$n=4$）、身体障害者福祉法関連施設（$n=1$）、児童福祉法関連施設（$n=1$）であった。また、2016年度の実習先として上記施設が含まれていたかについては、9課程（64.3%）が「含まれていた」と回答し、4課程（35.7%）が「含まれていなかった」と回答した。加えて、『人と動物の関係』に関わるサービスの実際については、上記の13課程すべてが、「動物介在療法」が提供されていたと回答した。同13課程のうちの1課程（7.7%）は、「飼い主のペットへの愛着（施設において飼育）」に関するサービスが提供されていたとも回答した。

また学生から、『人と動物の関係』を学ぶことのできる実習先での実習希望の有無について尋ねたところ、「あり」と答えたのは5課程（3.8%）であった。この5課程に対して学生からの要望総数を尋ねたところ、「1回のみ」と回答したのは3課程（60%）であり、残りの2課程（40%）は「2~4回」と回答した。さらに、『人と動物の関係』に関するサービスを含む実習先を開拓するための最大の障壁について尋ねたところ、(1) 社会福祉士養成校内に学生を指導するための仕組みがない（指導できる教員がいないという回答を含む）（$n=13$）が最も多く、次いで (2) 学生からのリクエストがない（$n=12$）、(3) 回答者の所属校が当該サービスを提供している実習先を知らない（$n=6$）、(4) 実習要件の中にそのようなものが存在しない（$n=4$）、(5) 追加でカリキュラムを設置する余裕がない（$n=2$）、(6) 動物アレルギーの学生がいる（$n=1$）、(7) 実習先の衛生上の問題（$n=1$）等が挙げられた。最後に、当該実習先開拓を進める方法や案について尋ねたところ、法改正（盲導犬育成施設等を実習先に加えることを含む）や、卒業論文等を通しての個別対応、動物介在療法を選択履修科目として開講する等が挙げられた。

<u>考察</u>：

本研究により、ソーシャルワーク相談援助実習の中に、『人と動物の関係』に関する内容を含んでいる実習先は極めて少ないことが明らかになった。その理由として、社会福祉士養成カリキュラム内に当該内容に関する規定がないことや、ペットが人間の生活にどのような影響を及ぼしているのかについての教員の関心レベル、また、学生自身からの要請が少ないこと等が示された。加えて、社会福祉士国家試験受験に係る教授内容の多さや制度による授業内容への縛りが、実習先の選択にも影響を与えていることが示されている。ただ、回答者からのコメントを概観すると、動物の存在がいかに人間の幸福を左右するのかについて理解のある教員も存在することから、法改正はもとより、多くの社会福祉士養成課程がそれらを含むためには、人間の生活における動物の役割についての実証的なデータや『人と動物の関係』に関する実習内容の具体例等を示すことも重要であると考える。

文　献

Arkow, P. （2015）. *Practical guidance for the effective response by veterinarians to suspected animal cruelty, abuse and neglect*. Power Point Presentation.

*この研究は、2016年度松山大学特別研究助成を受けて実施された。